

『星狩』 自選五十句 清水 伶

父の日の大笑面に逢いにゆく  
幾万の蝶を翔たせて夏の空  
昼銀河歩きはじめに羅生門  
冬の鴟そつと点りて人体図  
抽斗のなか紅梅の坂がある  
初蝶は真夜にはぐれた花骨牌<sup>はなかるた</sup>  
椿闇まぶたあるもの横切れる  
胎生の無数の濁り白もくれん  
深層の水買いにゆく夕さくら  
ガラス屋の向こう八月十五日  
かなかなの銅色<sup>あかがねいろ</sup>の愚直かな  
葉牡丹のなかはあざやかな生国  
縋帯を巻く梟になりたくて  
ぼうたんの荒々しくも月の跡  
鮎<sup>あじ</sup>食べて唇<sup>くち</sup>はつめたき水辺かな  
螢狩わたしの闇を見て帰る  
水鏡磨けば梟やって来る  
唇のしずかな水位羊歯ひらく  
うつうつと兎小屋あり木々芽吹く  
雛壇のどこかに真夜の畏のあり  
かくれんぼ蝶の白さを残したる  
青楓われらひかりの魚であり  
亡父<sup>ちち</sup>と母交り合うとき<sup>きりぎりす</sup>蠡斯

死をねむる母は白花さるすべり  
母死後のピアノに匿す秋螢  
讚美歌を閉じ冬蝶を漂わす  
冬銀河腕立て伏せの父がいる  
星狩に行つたきりなり縋梟  
裸婦ともなれず寒椿ともなれず  
おぼろ夜の紅絹一反を思いけり  
弦楽の一弦狂い蝶の昼  
牡丹の黙秘権なるまひるかな  
まなぶたのみづいてきたる芹の花  
裏側は永久<sup>とわ</sup>に牡丹の芽でありぬ  
茄子漬けて冥王星に近づけり  
湯ざめして百の海鵜に迷い込む  
西行に倦み冬蝶に誘われる  
人の死へけぶるまで独楽回しけり  
春衣着てわたくしという渚  
春眠のこの世の端のふくらはぎ  
陽炎の太き動悸をみておりぬ  
硝子切るしずけさにあり蟻地獄  
父の忌のとおくに吹かる蛇の衣  
菊枕<sup>きくまくら</sup>簪<sup>かんざし</sup>いっぱいありにけり  
頭<sup>かぶ</sup>のなかの林檎園なら盗りにゆく  
黒板の数式野うさぎのゆくえ  
回廊のどこまでが夢冬の鹿  
永遠の合わせ鏡と寒梅と  
たましいを華とおもえば霰ふる